



大野ヲ耕ス

オホノ
タガヤ

Vol. 2
発行 株式会社 起点



かつて大野にあった八基鉱山。

FEATURE

豊かな生物多様性を守るために、
今、私たちができること。

INDEX

- 1 生物多様性調査、2年目の春
- 2 大野地区の生物多様性を豊かにするために、KITENが実践する「ビオトープ計画」
- 3 大野ヲ耕スひと
- 4 大野対談
- 5 編集後記



大野中学校で同級生だったふたり



この手すりですり降りていました！



終始なごやかな空気のインタビューでした

と同じように、虫取りや川遊びをして、自然に囲まれて地域の人たちに見守られながら育ってほしいという気持ちもあって戻ってきました。

——一般的に田舎は窮屈というイメージもありますが、ふたりそう感じたことはなかった？

真人君 あまり感じなかったですね。ここが好きだし、今でもひとり川遊びしたりしますもん（笑）。一応、記録上では僕が家を継ぐ10代目になるのですが、いつかは継ぐだろうと思ってるし、家を守りたいという気持ちがあります。

夏美さん 私も窮屈だと思ったことはなく、一度は外に出てみようかなという感覚で県外に出ました。真人君と同じように、この土地を守っていきたくてという気持ちを持っていますね。外に出てみたからこそ、余計に大野の良さを感じるようになりました。

松本さん ふたりの話を聞いていると、地域が子どもを育ててきたということを感じますね。だからこそ、やっぱり学校がなくなってしまうことが悔しい。この地域で育つからこそわかる大野の良さがあるからです。小

中学校が閉校になったことで、私は自分が生まれ育った大野が「閉じていく」という感覚を持ちました。その大きな流れのなかで「何もしないまま、ただ見ていられるだけでいいのだろうか」という気持ちが湧き上がってきたんです。だからと言って何が出来るわけじゃないけど、こうしてふたりのような子やさまざまな人たちとつながっていくと、「何もできない」と言い切らなくてもいいのではという希望のようなものを持てるようになりまして。

——大野を守り、つないでいくためにどんなことが必要だと思いますか？

松本さん 小さくても、人とつながるきっかけや場を作って、私たちが「開く」ことではないかと思っています。外へ出た若者に「戻ってこい」と言うのではなく、大野出身とかも関係なく、ふらっと遊びに来たくなるような土壌を耕しておきたいです。今、うちの実家が使われていないので、そこを交流の場にできればと考えています。田植えや稲刈りの季節にみんなで集まって作業をして、青空の下で一緒にごはんを食べるだけでもいいじゃないですか。毎回同じメンバーで集まらなくて

もいいし、その時々で来れる人が来たらしい。そうやって、楽しみながらつながりを育んでいくうちに、また何かが生まれるかもしれないですね。

夏美さん 楽しそう、遊びにいきたいです！ 私も、同級生たちが大野に戻ってくるきっかけになればと思ってクラス会を開いているところがありますね。今は遠くに住む友人たちが、いつでも帰って来られる場でありたいと思っています。積極的に大野の外の人たちともつながっていきたくて、自分の手の届く範囲で、できることを続けていくことが大切なような気がしています。

3人のお話からはピンバシと大野愛が伝わってきました。大野のおおらかな風土が、人を育て、温かなつながりを育んできたのだと思います。学校はなくなりましたが、この土地に根づいた記憶や営みは、消えることはありません。大野にあたらしい風が吹いたら、きっとまた何か芽吹くのでは。そんな希望を胸に抱くぐらい、3人の笑顔がまぶしかったです。

6 編集後記

やや手探りの状態で製作始めた本誌でしたが、VOL.1が上がりついでに次号のテーマが輪郭を表してきました。奥村ライターのすずめもありVOL.2では地域の人にもスポットを当てています。結果として、「耕ス」土壌に層が生まれ、とても良い内容になりました。取材にご協力いただいた皆様にはこの場を借りて御礼を申し上げます。大野で生まれ育った方たちの話を反響することで、不思議なことに郷土への慕情や「地域課題に対する愛い」などを自分ごとのように感じる瞬間があります。僕の生まれは好間ですが、思春期に差し掛かる時期に平とも湯本とも小名浜とも呼べない地域へ転居しているの、正直なところ、ここがおいらのホームタウン！と思うような場所がありません。だからこそ、大野水耕生産の大和田さんや「帰れる場所がある」ということが生きていく上でどれだけ大切なことなのか、鼻にちり紙を詰めながら考える花粉症真っ只中の3月です。そうか、帰れる場所があることで生き物の命は巡るのかもしれない。さあ、ビオトープ作りを始めようじゃないか。

株式会社 起点 代表 酒井悠太

「大野ヲ耕ス」VOL.2を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。生物多様性の調査も2年目となり、私自身の見えるものや感じることも変化が起きました。葉っぱでひと休みしているトンボや草むらでビヨーンと元氣よく飛んでいるバツカを見つけては、うれしい気持ちになったり、どこから来たのだろうと考えたり。そして、人間の身勝手な営みでこれ以上生き物たちを追いやることのないよう、何が出来るだろうと自分ごととして捉えるようになりました。はじめの一步となるビオトープ作りが、今からとても楽しみです。それから、VOL.2では地域の人たちにお話を聞かせていただきました。「大野が好き」「守りたい」「つなげたい」と話す姿がとても印象的で、地域の土や風は「人」を育てるのだと強く実感しました。これから、大野を耕したり、開いたりするうちに、いろいろな風が吹いて巡って、小さな変化が起きていくのかも。そんなワクワクを感じながら、この号を書き終えています。

ライター 奥村サヤ

大野ヲ耕ス vol.2 2025年3月21日 第1刷発行

企画：「大野ヲ耕ス」製作委員会
テキスト：奥村サヤ
デザイン：高木市之助
イラスト：熊田菜花
写真：金成清次、奥村サヤ
監修：酒井悠太
資料協力：須田真一、日本自然保護協会

協力：ラッシュジャパン合同会社、大和田哲嗣（大野水耕生産組合）、
松本恵美子、大和田夏美、鈴木真人
生息調査地：福島県いわき市四倉町玉山地内
調査日時と天候：
・春季調査（2024年5月17日/晴/10:45～16:00）
・夏季調査（2024年8月3日/晴/10:45～17:10）
・秋季調査（2024年9月30日/晴/11:00～16:00）

発行元：株式会社起点
福島県いわき市四倉町駒込字広畑11
TEL 0246-85-5977 FAX 0246-85-5978

お問い合わせ：info@kiten.organic（起点）

本誌は「令和6年度 福島県地域創生総合支援事業」の助成を受けて発行しています



起点のnote



起点のinstagram

生物多様性調査、2年目の春

2023年に続き、生物多様性調査の2年目がはじまりました。

今年度も、東京大学総合研究博物館研究事業協力者の須田真一先生と、日本自然保護協会の岩橋大悟さんの協力をいただきながら、大野でオーガニックコットンを育てる起



芽吹きを待つコットン畑に爽やかな風が吹いていました

1年目で見えてきた、コットン畑周辺の環境は？

2023年からスタートした、福島県いわき市四倉町大野地区の生物多様性調査。昨年は1年間かけて、オーガニックコットン畑周辺に生息する昆虫を採集しながら、この地区の生物多様性を調べてきました。同じ場所を定点観測することで、その土地の環境が見えてくるのだそうです。

2年目の春、早速、気になることを聞いてみます。

——昨年1年間の調査で、大野地区の生物多様性はどんなことが見えてきたのでしょうか？



須田真一

東京大学総合研究博物館研究事業協力者。昆虫博士の父の影響で、自身も幼少期から昆虫に夢中



岩橋大悟

日本自然保護協会職員。自然保護活動のため全国を飛び回り、自然を生かした地域づくりを行っている

岩橋さん 生物多様性は、最低でも3年間継続して調査しないと見えてこないことが多いです。なので、まだ確実なことは言えませんが、現段階で言うところでは、良くも悪くもなくというところでしょうか……。ただ、東北地方全体で絶滅の危機に瀕している「カトリヤンマ」の姿を見ることができました。今後は、周辺の田んぼを調べるとより見えてくることもあるかもしれません。

のどかな風景が広がる起点の畑周辺ですが、生物多様性という視点で見ると、そうした大きな特徴はないらしい。少しがっかりした気持ちでいると「ビオトープを作ってみるといいかもしれないよ！」と岩橋さんが声をかけてくれました。

岩橋さん ビオトープは、本来その地域に住むさまざまな生物が安心して暮らす場所です。「ビオトープを作る」というと難しく感じるかもしれませんが、要は、生物が暮らしやすい「ため池」を作ればいいんです。畑の敷地内に穴を掘って底にビニールシートを敷き、水が溜まるようにするだけでも生き物たちの拠り所になるんですよ。

須田先生 水辺があることによって、ゲンゴロウやタガメなどの水生昆虫たちが来る可能性があります。虫たちが繁殖場所として利用できるようになることで、生物多様性が生まれるんです。

なるほど。多様性は失われていくばかりでなく、生物が暮らしやすい環境を作ることでも生み出すことができるらしい。目からウロコです。

春に出会った昆虫たち

草花が芽吹き、新緑がまぶしい季節。あたたかな風に誘われて昆虫たちも動き出します。コットン畑の周辺ではどんな虫たちと出会えるだろう



ホンサナエ

Shaogomphus postocularis

ずんぐりした体型が特徴。近年、数々が大幅に減り絶滅のおそれもある。幼虫は流れのゆるやかな川や湖の中で砂や泥にもぐって生活をしている



ヤマトシジミ

Pseudoizeeria maha

カタバミが食草。都心部でもよくみることのできるチョウ。どこにでもいるけど、どこにでもいる当たり前の素晴らしさを教えてくれる



ニホンカワトンボ

Mnais costalis

平地～山地の水生生植物が茂る環境が比較的よい川で見られるカワトンボの仲間。はねがオレンジ色のものと透明なものがある

生物多様性を守るために

須田先生は起点のオーガニックコットン畑周辺を「里山環境」として決して「悪くない」とおっしゃいます。今後は、生き物たちが住みやすい環境を作り「ゲンゴロウ」や「ホソバセセリ」、「カトリヤンマ」の姿が見られるようになること、生物多様性の幅がぐっと広がるそうです。そのためにはコットン畑だけではなく、さまざまな環境があると良いとアドバイスされました。

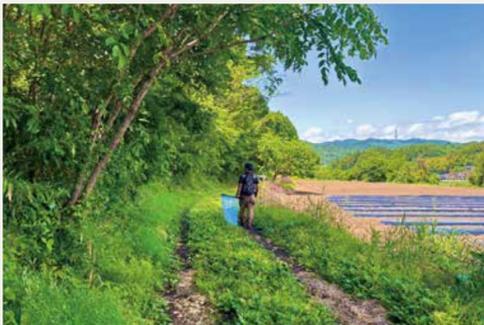
生物多様性調査を通して虫たちを観察していると、山も川も森も田んぼも、すべてがつながって生き物が暮らしていることを実感します。たとえば、トンボが住みやすい環境は、ヤゴが生息する田んぼなどの水辺と、成虫がエサを採ったり休む樹林や草地がある山の環境です。どれか1つの環境だけでは生き物たちの暮らしは成り立たず、豊かな山や川や森、人が手入れをした田んぼや畑があつて多様性が生まれていくのです。

岩橋さん 数千年にかけて形成されてきた日本の生物多様性は、実はこの50年から100年というとても短い時間のなかで急激に失われているんです。生物多様性が失われるという事は、生き物のつながりが失われて、絶滅が加速する可能性があるということです。たとえば、いまは回転寿司に行けばマグロやカツオ、アジ、サーモン、いくら、エビ、タコ、イカ、うにとさまざまなネタを楽しめますよね。でも、将来はサーモンだけしか食べられないという日が来るかもしれません。食の恵みが失われるだけでなく、自然災害が増加したり感染症のリスクが高まったりもします。生物多様性は、わたしたちの生活に密接にかかわっているんです。

生物多様性があることで、たくさんのお恵みを受けてきたことに、今さら気づかされました。多様性が失われていくということは、わたしたちの暮らしも脅かされていくということ。便利な生活を手放せないわたくしらは、その重要性がなかなか気づくことができません。

須田先生 だからと言って、むずかしく考える必要はないんですよ。里山の豊かな環境を守るべき場所ではしっかり保全し、人間が住みやすい都市は発展させていく。人間と自然の住処を共に残していくことで、現代の私たちの暮らしも継続していけばいいんです。そうやって戦略的に生き物たちを守ること、自然資本を回復させていきたいとわたしたちは考えているんです。

起点の畑がある大野地区も、これから生き物が暮らしやすい環境を戦略的に作ることで、多様性を生み出せる可能性があります。そのために何ができるか。真剣に考えて、行動していきたいと決意した2年目の春です。



コットン畑には多くの野鳥も住んでいる



4月～11月にかけて成虫がみられるギンヤンマ



コットン畑の前を流れる袖玉山川の河川敷



2 大野地区の生物多様性を豊かにするために。 KITEENが実践する「ビオトープ計画」

2024年、夏の生物多様性調査

今年の夏も、すごく暑い。年々暑くなつていて、生き物たちは大丈夫なのかと心配になる。人間の私とえば、エアコンの部屋から出られず、活動は早朝か日が暮れてから。自然環境も人間活動的にも、このままでいいわけがないと思わされるのが最近の夏である。さて、そんな夏真っ盛りの8月。今回も、昆虫学者の須田真一先生と日本自然保護協会の岩橋大悟さんと一緒にコットン畑周辺を調査しました。

トンボから考える日本の生物多様性

——大野の生物多様性調査はトンボを指標としています。今回も、さまざまなトンボと出会いましたが、日本には何種類のトンボがいるのでしょうか。

須田先生 日本は約200種類、世界には6000種類ほどいます。日本は、世界から見てもトンボの種類が多くて、例えばイギリスは60種類、ヨーロッパ全体では100種類ほどしかないんです。ヨーロッパは緯度が高いので単純に種類が少ないという理由もありますが、氷河期時代に氷に覆われてリセットされているので、生物進化の歴史が浅いんです。一方で、日本はそのようなことがなく、古来からの生物が進化してきました。イギリスには哺乳類の固有種が1種類もないのに対し、日本はニホンカモシカ、ニホンザル

など約50種類もいるんですよ。

岩橋さん イギリスやドイツは、産業革命時代に工業化と都市化が急速に進行する中で、森を破壊してしまった歴史もあります。気候が厳しいヨーロッパでは、一度森を伐採してしまうと再生は難しいんです。

須田先生 一方で、日本は定期的に木を切らないといふ森はなりません。実は、木を伐採しても再生できる国はアジアなどのごく一部だけ。世界には、生物が多様であると同時に危機的状況であるというホットスポットが35カ所あるのですが、日本は国土全体がホットスポットです。国で登録されているのは、日本だけ。それぐらい世界的に見て稀有な自然環境なんです。

岩橋さん 古来から「森は支配するもの」という思想がヨーロッパ。だから、森は切り拓いてきました。一方、日本は「森には神が



調査は LUSH ジャパンバイイングチームと共に行いました



トンボのメガネは何色メガネ？

いる」と信じ、共に暮らすものとして多様な生き物が守られてきた歴史があるんです。**須田先生** でもね、徹底的に自然を破壊してしまったことに反省もしていて、今ではヨーロッパの方が環境問題に関する意識が高く、個人の取り組みも環境政策にも意欲的です。一方で日本は、再生できてしまうから危機感がなく、自然環境に対する意識が育ちにくい。森や自然環境の大切さに国全体で気づくことができれば、保全活動にも意欲的になるのかもしれないね。

人間の自然に対する意識の違いで、環境も未来も大きく変わってしまう。できることから破壊した後に気づくのではなく、今、この瞬間から行動を変えていきたい。私たちに、何ができるのでしょうか。

夏に出会った昆虫たち

セミの大合唱が響きわたる生命力あふれる夏昆虫たちは水辺で遊んだり、木陰で休んだり…コットン畑の周辺は今日もにぎやかです



ホソミイトトンボ

Actagrion migratum

細長くスマートで、胸部側面と腹端が青い。平地・丘陵地の水生植物の多い池や沼で見られる。成虫で冬を越す珍しいトンボ



セイヨウミツバチ

Apis mellifera

在来種のニホンミツバチに比べて一回り体が大きい。唯一、人間が家畜に成功した昆虫。日本には明治時代に海外から輸入された



オオチャバナセセリ

Zinaida pellucida

林の周辺や草地で見られ花の蜜を吸う。イチモンジセセリによく似ているが、後ばねの白紋が一直線ではないことで見分け



ショウジョウトンボ

Crocothemis servilia

池や田んぼなどの流れのない水辺を飛ぶ。オスの体が架空の赤い怪物「猩々(しょうじょう)」を思わせることからこの名前がついた



「ハグロトンボ」は生息環境の減少により個体数が減っている



令和3年に閉校した大野第二小学校



身近な生物だけど、実は絶滅危惧種?!

最近、スズメを見かけましたか？ 実は今、私たちにとって親しみのある「スズメ」が激減しているそうです。ひと昔前は、電線に並んでチュンチュンとさえずる姿をよく見たはずが、たしかに今、その光景を見ることは稀です。減少の理由はいくつかあります。スズメは、かやぶき屋根や瓦屋根の隙間に巣を作っていました。現代の住宅は気密性が高く巣を作る隙間がありません。エサ場となる田園や草原は整備された駐車場に変わり、農業の使用で食料源の昆虫は減少してしまいました。私たちの生活の変化がスズメを追いやっていくのです。もちろん、それだけでなく気候変動も生息環境に影響を与えています。でも、スズメがいなくなると困ることって？ たえば、害虫被害が増え、農作物や街路樹に影響を与えます。『舌切り雀』に代表されるように、スズメをいじめる不幸が訪れ、助けると幸せが訪れるというおとぎ話はよくあります。昔の人はスズメを少なすぎると問題が起こるということを感覚的にわかってきたのかもしれない。これ以上減らさないために、まずは身近にいる生き物たちに意識や目を向けることから始めたいですね。



スズメ

Passer montanus

全長 14～15cm で、その大きさは他の鳥と比べる基準となる「ものさし鳥」としても知られる。食性は雑食性。

学校プールを活用したビオトープ計画

「春に話をしたビオトープ計画を本格化しましょうか！」

そう、私たちは春の調査時に、生き物が暮らしやすい環境を作ることでも多様性を生み出すことができる」ということを学んだのでした。その最適な場所として白羽の矢が立てられたのは、令和3年に閉校した「大野第二小学校」のプールです。実は、大野二小は令和7年2月から株式会社起点の事務所として廃校活用されています。起点では、長年親しまれてきた小学校を使わせてもらうにあたり、地域の方たちへ開かれた場所であるために、何ができるか考えてきました。

須田先生 たとえば、プールで水草を育てることで、水草が好きなゲンゴロウやヤゴなどの水生昆虫がやって来ます。すると、今度はトンボが育ち、それを食べる鳥がやって来ます。動植物が生きる場所を一つでも増やし

ていくことで、生物多様性の保全につながるんです。ビオトープは生態系の回復が期待できるうえ、自然観察会などでもできるので、地域の人や子どもたちが自然と触れ合う機会を作ることにもつながりますよ。

調べてみると、すでにほかの地域でもプールを活用したビオトープの事例があるようです。兵庫県西宮市山口町の市立船坂小学校跡地では、地元住民らによってプールがビオトープに生まれ変わり、絶滅危惧種の淡水魚など数十種類の水生生物が生息しているのだとか。また市内の小学生の自然観察の場としても利用されているそうです。

大野第二小学校のビオトープはまだ構想段階ですが、大野の生物多様性を豊かなものにするために、新たな試みとなりそうです。ビオトープ計画は生き物たちにとっても、地域に暮らす方たちにとっても、循環するものづくりを目指す起点にとっても、大切な一歩となるような気がしてわくわくしています。

大野ヲ耕ス人

大野水耕生産組合
大和田哲嗣さん

大野は、地域を耕す人たちによって豊かな土地が築かれた歴史がある。この土地のことをもつと知るために大野観光いちご園を訪ねてみた。



「大野」という地名を聞くと、いわきに住む人なら「大野観光いちご園」を思い浮かべる人は多いかもしれません。12月下旬から5月下旬ごろまでいちご狩りが楽しめる、いわき市を代表する人気の観光スポットです。ですが、その成り立ちには意外と知られていません。大野ヲ耕スなまずはずは話を聞かねばと、いちご園を訪ねてみました。

通年栽培を目指す、脱サラしてトマト農家に

出迎えてくれたのは、「大野水耕生産組合（大野観光いちご園）」2代目の大和田哲嗣さん。大野水耕生産組合では、いちご狩りだけでなくトマト栽培も行っていて、実はトマト栽培の方が歴史が長いのだそう。直売所には朝採りいちごのほか、ブランドトマト「サンシャイントマト」やフルーツのような甘さの「フルテイカ」などが並んでいて、市内各地から多くの人が買い求めにやってきました。

「大野水耕生産組合」は1990年に創業。農協に勤務していた哲嗣さんの父、正幸さんが39歳で脱サラし、独立して立ち上げたのがはじまりです。豊富な日照量と温暖ないわきの気候を活かして「年間を通してトマトを栽培する」という正幸さんの挑戦でした。

今こそ季節を問わずスーパーに並ぶトマトですが、当時は、寒さに弱いトマトを冬に、しかも東北で栽培するなんて「絶対に無理！」と言われていたそうです。しかし、正幸さんは、オランダから最新の栽培システムを導入し、土を使わず、肥料を水に溶かした培養液によってトマトを栽培する挑戦をはじめました。このオランダ式養液栽培は、全国で2例目となる先進的な取り組みでした。

「当時は、冬にトマトを栽培するという概念がありませんでした。でも、父はヨーロッパでは年間を通してトマトが栽培されていることに着目したんです。前例がなかった分、苦労したでしょうね。子どもの頃の記憶では、しょつちゅうシステムのトラブルで、夜中

もハウスに駆けつけていた父の姿を覚えていました」と哲嗣さん。栽培が安定してくると、2003年からはいちご栽培をはじめ「大野観光いちご園」がスタート。さらに、水耕栽培のノウハウを周辺の農家へ提供することで、大野に同様の栽培方法が広がりました。正幸さんの挑戦が、地域の新しい可能性を開いたのです。

父から受け継ぐもの、次世代へ残したいもの

2代目の哲嗣さんは、元々、家業を継ぐつもりでいたのでしょうか。「いえ、どちらかというと子どものころはやりたくないと思っていました（笑）。うちは田んぼもやってたので、休みの日は手伝いに借り出されるんですね。だから農業にはあまりいいイメージを持っていなかったんです」

そんな哲嗣さんの前職は消防士。20歳から19年間、火災や災害から地域住民の安全を守ってきました。しかし、30代後半に差し掛かったころ、これからの人生について考え、立ち止まったといいます。

「父も還暦を過ぎたし、「この先、家業をどうしているか」と真剣に考えるようになったんです。父が築き上げたものを受け継がずに、本当にいいのだろうかという思いが自分の中



章姫など5種類のいちごが時間無制限で食べ放題

大野観光いちご園
いわき市四倉町玉森内 23
☎ 0246 (33) 3434 営業時間：10:00～16:00

大野対談

大野の記憶と未来

大野の風と土が育むものは、作物だけでなく、人の心も。ここで生まれ育った人々の記憶を紡ぐとどんな景色が見えてくるだろう。



「大野ヲ耕ス」が生まれたのは、昨年のこと。生物多様性の調査をしたり、自転車地域を巡って歴史を紐解いたりするうちに、編集部はすっかりこの地に魅了されています。大野をもつと知ることで、未来につながるヒントが見つかるかも。そう思った私は、この土地で生まれ育った3人に声をかけてもらいました。ひとは、地元「劇団いわき小劇場」にて活動する松本恵美子さん。松本さんは、母校・大野中学校の閉校にあたり最後の卒業生と演劇作品制作したことを機に、大野を「開く」ための活動に力を入れています。そして、大和田夏美さんと鈴木真人君。ふたりは大野で共に育った同級生で、進学や就職のために一度県外へ出て、Uターンしました。

今回は、令和3年に148年の歴史に幕を下ろした「大野第二小学校」にて、世代の異なる3人に大野の思い出やこれから聞かされた。

——松本さんと夏美さんは大野一小、真人君は二小出身ですね。やっぱり母校は懐かしいですか？

——松本さん 卒業式以来、はじめて校舎に入ったのですごく懐かしいです。階段の手すりですりすり滑り台をしていた子がいたなあと、冬になると校舎内がすごく寒かったこととか、いろいろな記憶がよみがえってきます。

——小学生時代、3人はどんなことが印象に残っていますか？

松本さん 私がかつてのころは、日鉄の社宅があった活気がありました。1学年60人ぐらいいいたかな。八釜鉱山から四ツ倉駅裏にあり



松本恵美子

大野第一小学校、大野中学校出身。結婚を機に20代後半にいわき市内に転居。劇団での活動のほか、いわき時空散走大野・玉山エリアのサポーターを務める



大和田夏美

大野第一小学校、大野中学校出身。福島高専卒業後、県外へ就職。現在はUターンをし、大野に暮らしながら市役所職員として勤務している



鈴木真人

大野第一小学校、大野中学校出身。市内高校を卒業後、県外の大学へ進学。就職を機にUターンし、市内企業に勤務している



大野の思い出話が止まらない3人

るセメント工場へ石灰石を運ぶトラックが走っていたのですが、それが学校から見えてくるんですよ。あの頃の大野は、農村の中に工業的な要素があって、独特の雰囲気がありました。子どもの頃は当たり前前の風景でしたが、今考えると特別な感じがしますね。

真人君 僕たちの時代は1学年10人でした。人数が少ないと感じたことはなかったけど、3年生のときに、4年生と一緒に学習をする複式学級になったことは子供心にも衝撃がよく覚えています。ちょうど校舎の耐震工事があって、プレハブ校舎に移った時期のことでした。その耐震工事が終わったすぐあとに東日本大震災が起きたんです。

夏美さん もし耐震工事がされていなかったら、今、この校舎はなかったかもしれないってこと!? ちょっと鳥肌が立つね。私が出身の大野一小では1学年12人、真人君たちの二小と大野中学校で一緒に、同級生は合わせて22人でした。これでも人数が多い世代って言われていたよね。ずっと同じメンバーで過ごしてきたから、今でもみんなすごく仲良しです。

——小・中学校が閉校されると聞いたときは、どんな気持ちでしたか？

夏美さん 「やっぱりな……」というのが正直な感想です。私たちがいる頃から、閉校する雰囲気は少なからずあったから、覚悟はできていました。

松本さん 私は閉校なんて思いもよらなかったから、すごくショックでしたね。結婚を機に大野を出てから、近くにいたのにも関わらず地元の状況を気にかけてなかった

に生まれました。でも、子どもは育ち盛りだし、家庭もある。正直、公務員でいたほうが安定した生活が送れますから、2年ぐらいは悩みました。周りにもたくさん相談をして、自分と向き合って、ようやく「継ごう」と決心できたんです」

奇しくも、公務員を辞めたのは父と同じ39歳。哲嗣さんは消防士から転身し、農業の道へ進みました。

「いざやってみると、会社として回していかなければいけない大変さを日々感じています。ハウスとはいえ天候に左右されますから、雨の日が続けば発育が悪くなりますし、逆に暑さでやられてしまうこともあります。父がやってきたことがいかに偉大かを実感する毎日です」

大野生まれ大野育ちの哲嗣さん。娘さんは、2023年に閉校した大野中学校の卒業生のひとりでもあります。大野のこれからをどう見据えているのでしょうか。

「学校が地域にとってどれほど大きな存在だったか、小・中学校が閉校した今になって痛感しています。だからこそ、人が集まる場所や機会を増やしていきたいです。帰れる場所があるって、きっと心の拠りどころになっ

てくれますから」

時の流れとともに地域も移り変わります。しかし、この土地に根付いた人々の想いはしっかりと受け継がれています。

んです。閉校になったことを後から聞いて、こうなる前になんとかできなかったのかと無力感を感じました。だからこそ、大野の記憶や文化を守りたいと思うようになりました。夏美ちゃんや真人君のような若い世代が大野に戻り、この土地に愛を持っていてる子がいるということに希望を感じています。

——ふたりは進学や就職で一度県外へ出ていくけど、どうして戻ってこようと思ったのでしょうか？

真人君 この土地に恩返ししたいという気持ちが一番大きいんです。小さい頃から地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちに見守られて育ってきたので、大野の地域全体を家族のように感じてきました。都会暮らしも経験しましたが、あいつも交わさないと、隣にだれが住んでいるかわからない生活は息苦しかったですね。これからは色々な場所へ行ってきたまなことに挑戦したいという気持ちはありますが、最終的にはやっぱり大野に帰ってきたいです。

夏美さん 私も都会では常に気を張っている感覚がありました。休みの日もずっとアパートに引きこもっていて、気づいたら1日が終わってしまうみたいな。実家が居心地が良いのは当たり前だと思っけど、大野にしていると自然と肩の力が抜けて自分らしくいられますし、オープンでいられるんです。いつか自分に子どもができたら、私が過ごした子供時代